

奈良県立医科大学 学報



CONTENTS

新年挨拶	1
叙勲を受章／教授就任挨拶／第2期中期計画を策定中	2
2012年ノーベル賞授賞式随録	3
オックスフォード大学との学術協定セレモニー開催報告／漢方薬シンポジウム開催報告	4
同志社女子大学との第6回シンポジウム開催報告／	
第2回女子中高生の医理系進路選択支援事業開催報告	5
ハラスメント防止研修会開催報告、ハラスメント防止研修DVD案内	6
高大連携教育を推進／白樺生祭開催報告	7
意義深い看護学研究科での研究／保育園で特別支援学校生徒の職場実習受け入れ	8
クラブ紹介(サッカー部・茶道部)	9
図書館だより	10
産学官連携だより	11
外部資金獲得状況	12～14
平成24年度後期公開講座開催案内／電子カルテシステムのハードウェアを更新	15
奈良県の周産期医療提供体制の整備とその成果／臨床研修マッチング結果	16
脳死臓器移植シミュレーション実施報告／本学軽音楽部による第1回院内コンサート開催報告	17
医局等の移転のお知らせ／糖尿病チームと糖尿病教室の紹介	18
所属紹介(C5・C6・C7)	19
日本臨床カルクラウン協会の小児センター訪問活動報告／小児センタークリスマス会実施報告	20
第2回全国医学生クイズ選手権大会で医学科学生チームが優勝／絵画寄贈／	
児童虐待防止委員会に警察から感謝状	21
「血液凝固第Ⅶ因子代替抗体による新しい血友病A治療コンセプト」がNature Medicine誌に掲載／	
武田科学振興財団「特定研究助成」に採択／文部科学大臣表彰医学教育等関係業務功労者	22
レポート	23
メディア掲載情報／下ツ道／広告	24

January
2013

vol.43

新年のご挨拶

学長 吉岡 章

明けましておめでとうございます。

年末の総選挙では、3年前の民主党への期待がまたたく間に失望へと変わり、再び自公政権となりました。国民が期待しても国家や官僚組織は容易には動かないのか、それとも単に政治家が力量不足なのか、よく分かりません。ただ、国民は選挙結果に一喜一憂することなく、比較的冷静であることが救いといえれば救いと思われまます。

本学は、この3月で第1期中期計画を終了します。6年前には極めて過酷な財政状況での出発でしたが、教職員の高い意識・意欲と日々の精進が単年度収支を赤字から黒字へと導き、本学は着実に発展しつつあります。4月からの第2期中期目標として、荒井知事からは地域貢献、教育、研究、診療、まちづくり、そして法人運営と、6項目が示されました。県立大学である本学にとって、地域医療貢献は最重要ミッションであり、全ての計画が「県民のために」という基本姿勢のもと中期計画を鋭意立案しつつあります。

3.11の東日本大震災と津波による原発事故は、我々に深刻な大命題「エネルギー問題」と「大災害時のリスク管理」を突きつけました。私は最近、「死の淵を見た男、吉田昌郎と福島第一原発の500日（門田隆将著、PHP研究所）」を読みました。吉田所長はとるべき対応の全てをとって後に原発建屋の爆発が続いた極限の場面で自ら死を覚悟し、「こいつなら一緒に死んでくれるだろう」と部下のそれぞれの顔を思い浮かべていたと言います。私は命を賭してあの惨事の現場で最後まで戦った吉田所長や専門技術者、消防署員や自衛官といった真のプロの決意と行動を改めて称えたいと思います。予想をはるかに超えた大惨事の前で、人はその人間性を現し、攻撃したり、非難したりする人が多い中で人間の限界を超越した崇高な決断と果敢な行動をとることの出来る多くの人々がいたことを知りました。彼らのそんな一連の行動が、今回の大惨事を最小限に食し止めたと思います。その真の源はどこにあるか？ 指揮官と部下との関係は平素から人としてのコミュニケーションの下にお互いを認め合い、尊敬し合うことで相互の信頼感が築かれるものであれば、私は改めて思い知らされました。指揮官が突如現場に赴き、指示、命令を発したとしても、そしてたとえそれが責任感からの行動であったとしても、現場を知らず、人を知らず、専門知識を持たないそれらは、空転を越えて国家をも崩壊させかねない致命的な誤りになりうることを、今回の一連の事実は示しています。

顧みて、私は、本学において日常的に学生や患者さんに接し、教育し、研究し、治療している現場のプロたる教職員と更なるコミュニケーションを重ねて参ります。現場の声を聴き、知識を得、理解した上で相互の信頼関係を築き、指揮官としての決断と行動に移して参りたいと思います。

どうか全教職員の皆様、本年もよろしくお願い致します。

余野前看護師長が叙勲を受章！！

叙勲は、国家又は公共のために功労のあった方を対象に授与されています。
去る、11月3日に秋の受章者の発令があり前看護師長の余野 博子氏が受章されました。
心からお祝い申し上げます。

瑞宝単光章 余野 博子氏（前看護師長）

教授就任挨拶



麻醉科学講座教授就任のご挨拶

麻醉科学 教授 川口 昌彦 (かわぐち まさひこ)

この度、平成24年12月1日付けで本学麻醉科学講座教授に就任させていただくことになりました。その重責に身の引きしめる思いでございます。これまでに培われた伝統を大切に、さらに発展できるように誠心誠意努力させていただきます。麻醉科は手術麻酔だけでなく、集中治療室での全身管理、ペインクリニックなどの痛みの治療などにたずさわらせていただいております。時代のニーズに応じた、安全で質の高い医療を提供できるような環境を整備していきたいと思っております。また、基礎・臨床研究や麻醉科関連専門領域（サブスペシャリティ）での“学びの連鎖”を誘導することで本学のみならず、地域や世界に貢献できる活力のある麻醉科医師を育成していきたいと思っております。皆様方のご指導・ご鞭撻ならびにご支援賜りますようお願いいたします。



生理学第二講座教授就任のご挨拶

生理学第二 教授 堀江 恭二 (ほりえ きょうじ)

1月から生理学第二講座を担当させていただくことになりました。私は、医学部卒業後に1年間の内科研修を行ったのち、基礎医学の研究室で、マウスをモデルとしたゲノム変化法の開発を行って参りました。最近では、ES細胞から種々の細胞系譜への分化誘導や、体細胞からiPS細胞への初期化といった、細胞生物学的手法も多く取り入れています。このたびの生理学教室への赴任を、仕事の幅をさらに広めるための好機にしたいと考えています。教育面では、生理学は基礎医学と臨床医学を繋ぐための重要な課目と考えています。学生時代に感銘を受けた講義を思い起こしながら、微力ながらも、幅広く医学の面白さを伝えることに努めたいと思っています。要領を得ないことも多く、ご迷惑をおかけすることもあるかと存じますが、奈良医大の発展に貢献したいと考えています。何卒、ご指導、ご鞭撻を、宜しくお願い申し上げます。

第2期中期計画を策定しています

平成19年4月の法人化に伴い、教職員のみなさんには、第1期中期計画に基づいて業務に取り組んでいただいているところです。みなさんの協力により県地方独立行政法人評価委員会から「おおむね順調な進捗状況となっている」との評価をいただいております。

もうすぐ第1期中期目標期間（平成19～24年度）が終わろうとしており、第2期中期目標期間（平成25～30年度）に向けて、現在本学の中長期計画推進委員会を中心に議論いただきながら、第2期中期計画を策定する作業を行っています。

県からは「地域貢献」「教育」「研究」「診療」「まちづくり」「法人運営」という6つの柱からなる第2期中期目標策定の考え方が示されています。第2期中期計画はこれを踏まえるとともに、第1期中期計画の実績の総括や本学が将来に向けて目指すべき姿も考慮して、今後6年間で取り組む内容を記載していく予定です。

県の第2期中期目標は2月県議会で議決される見込みであり、その後3月までに本学の第2期中期計画について県の承認を受け、平成25年度年度計画を県に届け出る予定です。

4月から第2期中期計画及び平成25年度年度計画がスタートしますが、教職員のみなさんがその趣旨をご理解のうえ、達成に向けた積極的な取り組みをお願いします。

ノーベル賞授賞式に今村知明教授が出席

学長 吉岡 章

山中 伸弥教授のノーベル生理学・医学賞授賞式と一連の公式・関連行事に、本学健康政策医学今村 知明教授が正式随員として出席されました。

今回の受賞は、山中教授とその研究グループや京都大学はもとより御家族にとりましても最高の栄誉であります。この快挙を共に喜び、祝福し、そしてノーベル賞そのものへの敬意とあこがれを、本学の教職員、学生、同窓生が改めて共有することは極めて意義のあることと考え、今村教授には公務出張として参加いただくことに致しました。ここにホットなレポートをお届けします。

2012年ノーベル賞授賞式随員録 —学報に寄せて—

健康政策医学 教授 今村 知明

この度、私の義兄である京都大学教授の山中伸弥が、「成熟した細胞を多能性をもつ細胞へと初期化できることの発見」の功により栄えあるノーベル生理学・医学賞を受賞し、今村も2012年12月10日 ストックホルムで行われたノーベル賞授賞式に随員、出席できる栄誉を賜ることが出来ました。

またとない経験をさせて頂いたので、皆様に私の感じたところをお伝えできたらと思います。

ノーベル賞の授賞式は単純に授賞式のみを行うのではなく、一連の行事があり、現地では「ノーベルウィーク」と呼ばれています。約10日間ほどで、街全体が授賞式を中心に動いているように感じました。この「ノーベルウィーク」中、受賞者は20程度の行事に参加します。主なものは下記のとおりです。

- 12月 6日 (木) 受賞者懇談会 及び 生理学・医学賞コミッティ主催夕食会
- 12月 7日 (金) ノーベル賞記念講演 及び 生理学・医学賞受賞者のためのレセプション
- 12月 8日 (土) ノーベル賞コンサート
- 12月 9日 (日) ノーベル財団および王立スウェーデン科学アカデミー主催夕食会
- 12月10日 (月) ノーベル賞授賞式 及び ノーベル賞晩餐会
- 12月11日 (火) 王室晩餐会
- 12月13日 (木) ルシアボール晩餐会



受賞直後です。



恒例の椅子へのサイン。(実は最初は漢字でのサインはしてなくて後で食事をしている時に、「漢字も」と言って椅子を持って来られました。)

式典には日本からも京大の松本総長をはじめ、京都大学やグラットストーン研究所の方々、文部科学省や外務省、そして受賞者の親族も出席し、大変盛大な催しとなりました。

また、スウェーデン国王や王族の列席も賜り、世界の名だたる研究者や各国の代表も集まる中を、それはそれは厳かに式典は執り行われ、深い感動を覚えました。

現地での取材は苛烈を極め（おそらく40社以上のメディア関係者が駆けつけ）、常に一挙一動を見守られる日々が続いたため、当の山中夫妻は始終その対応にも神経を注いでいました。日本でも大変大きく報道されましたが現地の新聞でも、授賞式の次に行われる晩餐会で山中教授が王女と歓談されている写真が2面ぶち抜きで報道されるなど、特に深い注目を集めていたことが印象的でした。

今回の授賞式への同行をお許し下さった学長並びに学内関係者の皆様には深く感謝いたします。

オックスフォード大学との学術協定セレモニーを開催しました



固い握手で協定書を披露する
John Morris 名誉教授 (左) と吉岡学長 (右)

10月3日(水)、本学とオックスフォード大学 生理学・解剖学・遺伝学部との間で締結している学術交流協定の更新を記念し、学術協定セレモニーを開催しました。

セレモニーでは、John Morris 名誉教授と吉岡学長により協定書が披露され、教職員や研究者の交流、講義や講演、シンポジウムの開催、学術情報や資料の交換などで今後一層連携を推進することが確認されました。

続いて行われた記念講演会では、John Morris 名誉教授が、「Negative feedback in hormonal regulation: From simple concept to physiological sophistication」、第一解剖学の西真弓教授が、「Dynamics of corticosteroid receptors: implications from live cell imaging」と題して講演されました。



西真弓教授



熱心に聴講する参加者



John Morris 名誉教授

漢方薬シンポジウムの開催



11月18日(日)、大講堂において奈良県と本学の共催による「漢方薬シンポジウム2012」を開催しました。

このシンポジウムは、「漢方を活用して自分の健康を守ろう」～伝統あるモノと新しいモノで『元気で長生き』を実現～をテーマに、11月1日付で、本学の客員教授に就任された慶応義塾大学の渡辺賢治准教授から「ICT時代の漢方の活用」、奈良女子大学の城和貴教授と梅田智広准教授からは「ICTを利用したヘルスケアマネジメントの推進」と題した講演をいただき、パネルディスカッションでは古家仁附属病院長をコーディネーターに講演いただいたシンポジストに加

え、日本生薬連合会の嶋田康男技術参与にも参加いただき、テーマに沿って漢方を有効利用するうえでのICTの活用など様々な側面での議論をいただきました。

閉会挨拶を行った吉岡理事長は「漢方の知恵や技をいかに繋ぎ活用するのかが、今日のICTの活躍する場と考える。直ちに実現できるものは限られているかもしれないが、産学官が力を合わせて今後も検討を進めていきたい。」と締められました。

会場には約400人と多数の参加者が詰めかけ、会場からも熱心な質問をいただくなど、漢方への関心の高さを窺うことができました。



奈良県立医科大学・同志社女子大学学術交流に関する包括協定に基づくシンポジウム

第6回シンポジウム「肺炎 診療の進歩」を開催しました！

12月8日（土）に本学と同志社女子大学の共催によるシンポジウムを大講堂において開催しました。

当シンポジウムは同志社女子大と本学が毎年交互に開催しているもので、今回は「肺炎 診療の進歩」をテーマに、座長である本学教育開発センター藤本眞一教授と同志社女子大学生生活科学部西村公雄教授のお二人による進行で、同志社女子大学薬学部森田邦彦教授の基調講演「高齢化社会と肺炎」に続いて、医師の立場から本学感染症センター三笠桂一教授の「肺炎にかからないために、かかった時に」、薬剤師であり研究者の立場から同志社女子大学薬学部松元加奈専任講師の「肺炎に対するクスリの適正使用」、栄養士の立場で滋賀医科大学医学部附属病院の栗原美香主任栄養士（管理栄養士）から「肺炎に管理栄養士としてどう関わるか」、看護師の立場から本学看護部松浦一看護主査の「飛沫感染予防 咳やくしゃみでうつる感染症を予防する」と題して、それぞれ講演いただきました。

講演では肺炎が日本で3番目に多い死因であること、肺炎がどんな病気であり、その予防方法や治療にはどのようなものがあるのか、また感染を防ぐためにはどのような対策があるかなどについて、それぞれの立場から分かりやすく説明をいただきました。

県内外から約250人と多数の方々に参加いただき、総合討論の際には参加者ご自身の経験などを踏まえたいろいろな質問が出、会場と壇上の先生方との間で白熱した討論が行われました。



女子中高生の医理系進路選択支援事業(第2回)

プリズム眼鏡で『脳の働き』を体験してみよう！

8月の開催に続いて2回目となった今回は、10月28日（日）の白樺祭開催に合わせて基礎医学校舎4階の小講義室で実施しました。対象者を中・高校生に拡大したこともあって、募集人員の20人を大幅に超える応募があったため、参加者枠を最大限に拡大して当日は33名の参加となりました。

今回はプリズム眼鏡をかけた自分自身の運動変化を観察して、脳の適応メカニズムについて考えるという内容でした。第一生理学教室の和田講師の説明に続いて実習に入りました。本来は、屋外でのボールを投げる予定でしたが、天候不順により、室内での実施となり、6班に分かれた参加者はプリズム眼鏡をかけて壁的に向かって指差しを繰り返し行い、その後、眼鏡を外して同じことを行い、さらに右手に続いて左手でも行いました。

プリズム眼鏡は光を屈折させるので、思う場所に指を指せません。指を指す人、その誤差を確認する人、誤差数値を紙にメモする人、さらにその数値をパソコンに入力する人と参加者はそれぞれの役割を担って、まさに雰囲気は共同作業を行う実験室です。



ボランティアの本学学生さんたちの協力を得ながら誤差の値をパソコンで集計し、更にすべてのグループの値を集計して、どのような誤差が起こるのか和田講師から解説をいただきました。

はじめは緊張気味の様子だった中高生たちも、実習が進むにつれ緊張もほぐれ、医理系を目指す中高生にとって楽しい実験学習となりました。また、今回も多数の学生ボランティアの皆さんの協力で無事イベントを開催することができました。

ハラスメント防止研修会を開催しました

本学、女性研究者支援センターが平成24年12月14日（金）に学内の教職員を対象にハラスメント防止研修会を開催しました。同センターの御興特任教授が「大学におけるハラスメントとその発生防止」について、職場内・大学内で起こりうるハラスメントの事例を紹介しながらセクハラ、パワハラ、アカハラについて講演しました。受講者は日頃から相手を尊重したコミュニケーションをとることがいかに大切であるかということが再認識でき、大変有意義な研修会となりました。

女性研究者支援センター「まほろば」では、このようなハラスメント防止研修会を今後も積極的に行っていくと考えています。



研修会の様子



【ハラスメント防止研修DVDの案内】

女性研究者支援センター「まほろば」では、ハラスメント防止研修のための教材としてオリジナルDVDを制作いたしました。こちらのDVDでは3つの事例を挙げ、それぞれの問題点についての解説・改善例を紹介しています。

DVDの視聴・貸出を希望される方は、女性研究者支援センターまでご連絡下さい。

内線：2525 E-mail：jshien@naramed-u.ac.jp

平成24年度 中島佐一学術研究奨励賞の募集

この賞は、故中島佐一名誉教授のご遺族からの寄付金を財源として、医学の学術研究に優れた業績をあげた本学の若手教員を顕彰し、さらなる研究の発展を奨励することを目的として、平成5年度に創設されたもので、毎年度募集しています。

今年度も、下記により募集しますので、積極的なご応募をお待ちしています。

募集期間	平成25年1月31日(木)まで
募集要項	学内ホームページに応募要項及び申請書を掲載しています。 学内専用→研究推進課→各種団体からの研究助成金について →中島佐一学術研究奨励賞 http://top.naramed-u.ac.jp/jimu/kenkyu/nakajimasho.htm
応募資格	<ul style="list-style-type: none"> ・奈良県立医科大学医学部医学科の若手教員（原則として申請時に45歳未満の者とする。） ・1教室につき1名（附属病院中央部門に勤務する教員については、その出身教室に所属するものとみなす。）
受賞者数	原則2名
副賞	研究奨励金を授与（平成23年度は、1人につき30万円）

高大連携教育を推進

本学では、高校生の理科に対する興味を高めるため、高校生を対象とした大学での講義、実習の体験的学習を行っています。

今回は10月26日に「カメの解剖」をテーマにして、本学の生物学実習室で生物学教室教員3名、外部講師1名、及び医学科学生有志3名の指導により行いました。参加者は、畝傍高校の2年生21名の他、生物に対する理解を深めるため、本学の看護学科の学生有志8名も加わり総勢29名となりました。当日は、京都大学の松井助教による「皮膚の進化」をテーマにした講義の後、須磨海浜水族園から提供いただいた16匹のカメの解剖を行いました。高校生は普段の授業では体験できない実習に熱心に取り組みました。



〈実習を終えての感想〉

○看護学科3年生 康原 夏子

座学だけの生物授業を受ける看護学科にとって、カメの解剖はとても貴重な経験になりました。看護学科の学生は初めての生物学実習に緊張していましたが、朗らかな先生方の丁寧なご指導により、明るい雰囲気の中で最後までやり遂げることができました。まだ麻酔がかけられていない、のっそりと動き回る姿を見るとなんだかかわいそうな気持ちにもなりましたが、私たちのために身を捧げてくれたカメたちに感謝しています。



○畝傍高校2年生 匿名希望

最初は、解剖することに少し抵抗を感じていましたが、実際にやってみて、普段見ることができない世界を見ることができ、とても貴重な体験になりました。特に心臓が動いているのを見たときは、私たちの心臓もこうして動き、生命を維持しているんだなと、とても感動しました。教科書の絵や図を見るだけでは分からないことも教えていただいたり、新たな発見もたくさんあったので、今後の勉強にもつなげていきたいと思います。また機会があれば、他の生物の解剖もしてみたいです。

平成24年度

白檀生祭のご報告

白檀生祭実行委員長 寺井 太一 (医学科5年生)

今年も例年同様十月末の秋、爽やかな季節に平成24年度奈良県立医科大学白檀生祭を開催させていただきました。今年度のテーマは「そうだ、奈良医大に行こう!!」です。様々な年齢の方、多くの方々に我が母校奈良県立医科大学に来てもらい、親しみを持っていただきたいという思いから、このテーマに決定させていただきました。近年雨続きの白檀生祭でしたが、今年は少し雨がパラつく場面はあったものの、何とか持ち直し、テーマの通り、多くの方々に楽しんでいただき大成功を収めることができました。



去年CPR体験、血管カテーテル治療の練習模型の展示が行われ、大変好評だったことから、今年はさらに医療現場を知っていただく力をいれました。その結果、模擬面接、心電図、エコー、点滴、気管挿管、縫合結紮、ルンバル、グラム染色、CVカテーテルなど様々な手技を体験して頂き、学生のみならず多くの一般の方々のご好評をいただきました。また、シンポジウムには、ロシナンテス川原尚行医師をお招きし、「明日の子どもたちの笑顔のために～スーダン・東日本大震災での活動～」という演題にてご講演をいただきました。そしてチャリティーバザーでは様々な教室や、大学周辺の店舗に協力して頂き、川原先生が理事長を務められているNPO法人ロシナンテスへ支援金として寄付いたしました。

また、「中村蒼トークショー」や「平井喜美ライブ」を行い、大いに盛り上がりました。白檀生祭委員によるステージの企画や、各部活動による模擬店も例年以上に力が入っており、大勢の方々に楽しんでいただけました。

最後になりましたが、今年度も奈良県立医科大学白檀生祭を開催するにあたりご協力くださった大学当局、同窓会及び関係者様各位、並びに多くのアドバイスを下さった諸先輩方にこの場をお借りして、実行委員一同心より御礼申し上げます。本当にご協力ありがとうございました。どうか来年以降も白檀生祭をよろしくお願いいたします。



意義深い看護学研究科での研究

看護の最前線で活躍できる高度な実践能力や健康の諸問題を探究する研究能力を有する看護職者を養成するために、平成24年度から「看護学コース」と「助産学コース」を開設しています。第1期生として12名が入学し、日々研究に励んでいます。

看護学研究科（修士課程）に進学して

A棟7階南小児センター・看護学研究科1回生 下辻 聖子

今年の四月から、職場のスタッフに協力を得ながら社会人として奈良県立医科大学看護学研究科で勉強してい



左より 下辻聖子さん、榊 裕美さん、石澤教授（成人看護学）

ます。看護短大を卒業して9年ぶりに机を並べて学ぶことは新鮮でとても楽しく有意義な時間となっています。大学院なので英語論文を読み、プレゼンテーションをしないといけないので、英語が苦手な私は四苦八苦しましたが、先生方の手厚いご指導により英語に対するアレルギー反応もだいぶマシになりました。実践しながら学ぶことは、臨床での疑問点が明らかになったり、成功事例を根拠づけたりしてすぐにフィードバックをすることが出来ます。同じ敷地内に学ぶ機会や仕組みがあることはとても恵まれていると実感しています。大学院への進学を考えている方に、ぜひ奈良県立医科大学看護学研究科への進学をお勧めします。

(総務課)

保育園で特別支援学校生徒の職場実習を行いました。

奈良医大では地域への貢献の一環として、特別支援学校生徒の自立支援や就労の可能性を広げていただくために職場実習の受け入れを行っています。本年6月に看護補助業務の実習を受け入れましたが、この度、11月8日（木）～10日（土）の3日間の日程で、なかよし保育園において保育補助業務の職場実習を受け入れました。県立高等養護学校の石原さんは、コミュニケーションを大切にしながら子どもたちと楽しく話をしたり遊んだり、文化祭の事前準備では、子どもたちのシール台紙を几帳面に作り上げたり、レイアウトでは星型を丁寧に切ったりと意欲的に取り組んでくれました。実習最終日の10日（土）は、保育園の文化祭で、石原さんは、お母さんと一緒に練習したジブリメドレーの演奏を披露してくれました。石原さんは、「すごく楽しかったです！卒業後も子どもに関わる仕事がしたいです！」と、笑顔で話してくれました。今回の受け入れは、保育士も園児にとってもよい出会いとなり、今後の保育活動にも繋がる有意義な取り組みでした。

〈実習を終えての感想〉

石原さん：「子ども達と本を読んだり、折り紙したり、とても楽しい3日間でした。文化祭では、お母さんと一緒に演奏も出来、良い思い出が出来ました。本当に3日間良い体験が出来ました。」



石原さん親子の演奏



文化祭の様子



実習中の石原さん

本学の学生は、勉強だけをしているわけではありません。

多くの学生は、文化系13部、体育系24部のうちのいずれかのクラブに所属しています。そして、心身を鍛え、交友を深め、青春を謳歌しています。

さて第11回のクラブ紹介は、サッカー部と茶道部です。



サッカー部

「奈良医大サッカー部で学べるもの」

部 員:18人 マネージャー4人

顧 問:斎藤能彦(第一内科教授)

キャプテン:吉本隆晃(4年)

活 動 日:月・水・金・日(試合が入れば)

こんにちは。私たち奈良県立医科大学のサッカー部は現在一年生6人、二年生4人、三年生2人、四年生4人、五年生2人、マネージャー4人の計22人で活動しています。西医体優勝を目標とし、週に3回部員全員一丸となって練習に励んでいます。活動場所は基本的には大学のグラウンドを使用していますが、日の暮れるのが早い冬場などは、ナイター設備のあるグラウンドや近隣の中学校なども借りてしっかりと練習することができます。

今年の公式戦はリーグ戦、西医体ともに残念な結果になってしまいましたが、部員一人一人がこの悔しさをばねにして、来年に向けて着実に力をつけて行っています。

また、サッカー部は単にサッカーをするためだけにあるものではありません。サッカーというスポーツは11人が好き勝手に戦ってはバラバラになってしまいます。11人の個々が互いを認め合い、信頼しあうことで一つのチームとなるのです。またサッカー以外のところでも先輩や後輩がいて、規律や挨拶を学ぶこともできます。

サッカー部ではこうやって単に体を動かすだけでなく、サッカーというスポーツを通じて学校では学べない医師になるのに必要な社会性や人間性を育てることもできます。サッカー部は奈良医大の部活の中で一番すばらしくておもしろい部活だと思います。奈良医大サッカー部のホームページも最近新しくなったので、ぜひ一度ご覧になってください。

(<http://naramedfc2013.web.fc2.com/>)



茶道部

「一期一会」

部 員:19名

顧 問:吉栖正典(薬理学教授)

部 長:畑中彩李(4年)

活動内容:茶道の稽古、お茶会

練 習 日:不定期(主に月・木)

私たち茶道部は、薬理学教授の吉栖正典先生に顧問をしていただき、表千家の井倉宗陽先生のご指導の下、駅近くのお稽古場か学校のお茶室にて活動しています。部員は医学科5名、看護科14名で、兼部している人が多く、自分の予定に合わせて先生のもとでのお稽古に行き、勉強や実習で忙しくても空いている時間を見つけて部員同士が教えあったりと文武両道をさらりとこなす人が揃っています。お稽古以外には京都の不審庵にお家元見学や研修に行ったり、お寺さんや他大学主催のお茶会に行ったりと茶道を通して交流を深めています。

また、昨年の春に、学長をはじめ学校側のご支援を頂き、看護学科棟に立派なお茶室を作っていただきました。お稽古しやすい素晴らしい環境が整ったので、昨年は初めて学祭でのお茶会を開くことができました。写真はその時のものです。次の目標は年に一度開かれる奈良医大主催の春のお茶会です。日々のお稽古の成果を発揮できる場ですので、部員一同、お稽古に励んでいます。

茶道は一期一会の精神の元におもてなしの心をとても大事にしています。将来患者さんをはじめ人と人との関わりが重要になる医療人になっても、この心は相通じるものがあると思います。茶道の良いところは、礼儀作法や綺麗な作法が身に付くだけでなく、日々の生活の中にもおもてなしの心を意識することでお互いが気持ちのよい時を過ごすことができます。春のお茶会は3月に万葉ホールで行われます。ぜひみなさんも一度、お茶会の雰囲気や体験しておもてなしの精神に触れてみて下さい。

産学官連携だより

④大学シーズ発信(新技術説明会)

大学の研究成果は、一般的には研究者による論文発表の形で公開されますが、産業上の利用価値が高いと判断される研究成果(例:医薬、診断薬、医療機器開発につながる成果)は、大学が法人として特許出願を行うことにより産学官連携につなげることが可能です。今回は、産学官連携の具体事例をご紹介します。

去る、平成24年10月26日に本学 病理病態学講座 島田講師がJST主催の「新技術説明会」で研究成果の発表を行いました。「新技術説明会」は、大学等の研究機関の研究者がシーズ発表を行い、産業界とのマッチングを図るもので、JSTが産業界に広報活動を行い、シーズに興味を持つ企業が聴講し、発表後に企業との個別面談により連携に向けた協議を行うというものです。

今回、島田先生にご発表いただいた内容は、「注目の新技術」としてJSTのホームページでも取り上げられるほど注目度の高いものでした(<http://jstshingi.jp/newtech.php>)。

新技術説明会は、大学の新しい成果を産業界に紹介するものですが、発表するだけでは不十分です。企業がシーズを活用して事業化するためには、大学による特許出願が必要です。なぜなら、特許による成果(新技術)の保護を行わずに発表してしまうとその成果を誰でも使用することができることになるからです。そうすると、企業は安心して事業化のために研究開発投資ができなくなってしまいます。

今回の案件は、学会発表前に産学官連携推進センターに相談いただけたので、実用化が見込める技術であると判断して大学が発明を承継して特許出願を行うことができました。そして、“官”であるJSTの仕組み「新技術説明会」を利用して“産”である企業への連携提案を“学”である本学が行うことができた次第です。

その結果、複数の企業から詳細な内容を聞きたいとの申し込みを受けており、共同研究などに向けた協議が進行中です。なお、現時点における具体的内容については、各企業の今後の事業展開とも関係してくるのでお知らせすることができません。また、大学が行った特許出願内容も出願日から1年6ヶ月は未公開ですので公開までは「秘密情報」として取り扱うこととなります。しかし、特許出願のあとの論文発表は、特許の権利化には、原則、影響を及ぼしません。今後は、企業と実用化を目指した連携を行っていくとともに、研究成果を論文として広く発表いただくこととなります。特許出願後の論文発表は、その出願の信憑性を様々な実証データで証明するとともに、当該技術を公開PRすることにもつながりますので、事業化を行おうとする企業をサポートすることにもなります。

世界で初めてヒト受精卵からES細胞を作成したことで知られ、昨年のノーベル賞の候補にも名前のあがっていたウィスコンシン大学教授のジェームズ・トムソン先生は、論文投稿する前に米国の仮出願制度を利用して特許出願日を確保しておいて、論文投稿できるだけのデータがそろった時点で論文投稿を行っています。この手法は、米国における先端医療技術に関連する特許出願戦略の常道とされています。島田先生の案件も同様の手順で進められており、その戦略は世界標準といえます。近い将来、必ず事業化されると確信しています。

※参考文献：国際医薬品情報2011年5月23日〈特別号〉製薬業界の特許戦略を考えるアカデミア・ベンチャー・中堅製薬企業の医薬品の特許戦略(2011年5月23日〈通巻第938号〉) 知的財産戦略ネットワーク取締役、弁理士 長井 省三

平成24年度

外部資金獲得状況

96件 305,719,739円(間接経費を含む)(平成24年12月31日現在)

(1) 平成24年度厚生労働科学研究費補助金

①研究代表者

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名
食品の安全確保推進研究事業	健康政策医学	教授	今村 知明	食品防御の具体的な対策の確立と実行検証に関する研究
政策科学総合研究事業 (政策科学推進研究事業)	健康政策医学	教授	今村 知明	医療における情報活用を行う上での適切な国際疾病分類に関する研究
健康安全・危機管理対策総合研究事業	健康政策医学	講師	小川 俊夫	地域社会における自動体外式除細動器(AED)の役割と費用に関する研究
再生医療実用化研究事業	整形外科学	医員	上羽 智之	難治性骨折(偽関節)に対するヒト骨髄細胞シートを用いた低侵襲治療手技の開発に関する研究
障害者対策総合研究事業 (精神障害分野)	精神医学	教授	岸本 年史	精神障害者に対する包括的禁煙対策の確立

②研究分担者

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名	研究代表者名等
食品の安全確保推進研究事業	地域健康医学	学内講師	佐伯 圭吾	国際食品規格策定に係る効果的な検討プロセスの開発に関する研究	京都大学 医学部公衆衛生学教室 里村 一成
創薬基盤推進研究事業	分子病理学	教授	國安 弘基	Claudinを標的とした創薬基盤技術の開発	大阪大学大学院 薬学研究科 近藤 昌夫
食品の安全確保推進研究事業	健康政策医学	准教授	赤羽 学	食品防御の具体的な対策の確立と実行可能性の検証に関する研究	奈良県立医科大学 健康政策医学 今村 知明
食品の安全確保推進研究事業	健康政策医学	助教	田村 光平	食品防御の具体的な対策の確立と実行可能性の検証に関する研究	奈良県立医科大学 健康政策医学 今村 知明
政策科学総合研究事業 (政策科学推進研究事業)	健康政策医学	講師	小川 俊夫	医療における情報活用を行う上での適切な国際疾病分類に関する研究	奈良県立医科大学 健康政策医学 今村 知明
食品の安全確保推進研究事業	健康政策医学	教授	今村 知明	国際食品規格策定に係る効果的な検討プロセスの開発に関する研究	京都大学 医学部公衆衛生学教室 里村 一成
食品の安全確保推進研究事業	健康政策医学	准教授	赤羽 学	食品を介したダイオキシン類等の人体への影響の把握とその治療法の開発等に関する研究	九州大学 古江 増隆
食品の安全確保推進研究事業	健康政策医学	教授	今村 知明	新開発バイオテクノロジー応用食品の安全性確保並びに国民受容に関する研究	国立医薬品食品衛生研究所 手島 玲子
健康安全・危機管理対策総合研究事業	健康政策医学	教授	今村 知明	地域社会における自動体外式除細動器(AED)の役割と費用に関する研究	奈良県立医科大学 健康政策医学 小川 俊夫
再生医療実用化研究事業	健康政策医学	准教授	赤羽 学	難治性骨折(偽関節)に対するヒト骨髄細胞シートを用いた低侵襲治療手技の開発に関する研究	奈良県立医科大学 整形外科学 上羽 智之
エイズ対策研究事業	健康政策医学	講師	小川 俊夫	HIV感染症の医療体制の整備に関する研究	国立病院機構 九州医療センター 山本 政弘
難治性疾患等克服研究事業	内科学第一	教授	斎藤 能彦	特発性心筋症に関する調査研究	国立循環器病研究センター 心臓血管内科 北風 政史
難治性疾患等克服研究事業	内科学第二	教授	木村 弘	呼吸不全に関する調査研究	京都大学 大学院医学研究科 三嶋理晃
循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業	内科学第二	教授	木村 弘	睡眠呼吸障害による生活習慣病に関する医療情報提供とその効果の評価	愛媛大学 大学院医学系研究科 谷川 武
循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業	内科学第二	教授	木村 弘	肥満・高血圧合併睡眠時無呼吸患者に対する防風通聖散及び大柴胡湯の治療効果の比較と病態生理の解明	京都大学大学院医学研究科 呼吸管理睡眠制御学 陳 和夫
難治性疾患等克服研究事業	内科学第三	教授	福井 博	門脈血行異常症に関する調査研究	東京医科大学 森安 史典
難治性疾患克服研究事業	神経内科学	教授	上野 聡	スモンに関する調査研究	国立病院機構鈴鹿病院 小長谷 正明
難治性疾患等克服研究事業	神経内科学	講師	杉江 和馬	希少難治性筋疾患に関する調査研究	東北大学 青木 正志
再生医療実用化研究事業	整形外科学	教授	田中 康仁	難治性骨折(偽関節)に対するヒト骨髄細胞シートを用いた低侵襲治療手技の開発に関する研究	奈良県立医科大学 整形外科学講座 上羽 智之
再生医療実用化研究事業	人工関節・骨軟骨再生医学	教授	川手 健次	難治性骨折(偽関節)に対するヒト骨髄細胞シートを用いた低侵襲治療手技の開発に関する研究	奈良県立医科大学 整形外科学講座 上羽 智之
再生医療実用化研究事業	整形外科学	学内講師	城戸 顕	難治性骨折(偽関節)に対するヒト骨髄細胞シートを用いた低侵襲治療手技の開発に関する研究	奈良県立医科大学 整形外科学講座 上羽 智之
難治性疾患等克服研究事業	小児科学	教授	嶋 緑倫	小児新生児期における遺伝性血栓症(プロテインC異常症を含む)の効果的診断と治療予防法の確立に関する研究	九州大学 大賀 正一
エイズ対策研究事業	小児科学	教授	嶋 緑倫	血友病とその治療に伴う合併症の克服に関する研究(第VIII,IX因子製剤のインヒビター発生要因に関する研究)	自治医科大学 坂田 洋一
障害者対策総合研究事業 (精神障害分野)	精神医学	助教	深見 伸一	精神障害者に対する包括的禁煙対策の確立	奈良県立医科大学 精神医学講座 岸本 年史
障害者対策総合研究事業 (精神障害分野)	精神医学	教授	岸本 年史	治療抵抗性統合失調症に対する治療戦略のためのデータベース構築に関する研究	群馬大学 精神科 三國 雅彦
障害者対策総合研究事業 (精神障害分野)	精神医学	教授	岸本 年史	精神疾患患者に対する早期介入とその普及啓発に関する研究	東邦大学 水野 雅文
医療機器開発推進研究事業	精神医学	講師	安野 史彦	脳梗塞急性期における局所酸素輸送と組織内酸素分圧の画像診断法の開発と血栓溶解治療の最適化	国立循環器病研究センター 飯田 秀博
難治性疾患等克服研究事業	皮膚科学	教授	浅田 秀夫	重症多形滲出性紅斑に関する調査研究	杏林大学 塩原 哲夫
がん臨床研究事業	泌尿器科学	教授	藤本 清秀	高悪性度筋層非浸潤癌に対する経尿道的膀胱腫瘍切除後の治療方針の確立に関する研究	札幌医科大学 泌尿器科 塚本 泰司

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名	研究代表者名等
がん臨床研究事業	耳鼻咽喉・頭頸部外科学	研究員	上村 裕和	NO口腔癌における選択的頸部郭清術とセンチネルリンパ節ナビゲーション手術の無作為化比較試験	愛知県がん研究センター 長谷川 泰久
難治性疾患等克服研究事業	輸血部	教授	藤村 吉博	血液凝固異常症に関する調査研究	慶応義塾大学 村田 満
医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業	輸血部	准教授	松本 雅則	輸血用血液製剤及び血漿分画製剤投与時の効果的インフォームド・コンセントの実施に関する研究	虎の門病院 血液内科 牧野 茂義
難治性疾患等克服研究事業	新生児集中治療部	教授	高橋 幸博	小児新生児期における遺伝性血栓症(プロテインC異常症を含む)の効果的診断と治療予防法の確立に関する研究	九州大学 大賀 正一
新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業	感染症センター	講師	笠原 敬	自然災害時を含めた感染症サーベイランスの強化・向上に関する研究	国立感染症研究所 谷口 清州
エイズ対策研究事業	健康管理センター	准教授	古西 満	ART早期化と長期化に伴う日和見感染症への対処に関する研究	長崎大学医学部歯学部附属病院 感染症制御教育センター 安岡 彰
障害者対策総合研究事業	看護学科	教授	飯田 順三	児童青年精神科領域における診断・治療の標準化に関する研究	国立国際医療研究センター 府台病院 齊藤 万比古
難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業	泌尿器科学	教授	藤本 清秀	標準的治療の確立が臨まれる難治性疾患に対する新規治療法の開発	九州大学 中西 洋一
障害者対策総合研究事業(精神障害分野)	精神医学	研究員	森川 将行	新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究	国立精神・神経医療研究センター 竹島 正

(2) 独立行政法人 国立がん研究センター

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名	主任研究者名等
がん研究開発費事業	放射線医学	講師	穴井 洋	有効なIVR手技の開発と標準化のための多施設共同研究	国立がん研究センター中央病院 荒井 保明
がん研究開発費事業	放射線医学	講師	穴井 洋	進行肝胆膵がんの治療法の開発に関する研究	国立がん研究センター中央病院 奥坂 拓志
がん研究開発費事業	健康政策医学	講師	小川 俊夫	国際比較の観点からみたわが国のがん対策のあり方に関する研究	国立がん研究センター 加藤 雅志
がん研究開発費事業	健康政策医学	講師	小川 俊夫	がん研究企画と評価の方法論に関する海外動向調査と医療経済的視点からの考察	国立がん研究センター 吉田 輝彦

(3) 独立行政法人 国立成育医療研究センター

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名	主任研究者名等
成育医療研究開発費事業	小児科学	教授	嶋 緑倫	小児出血・血栓性疾患診療の向上と均てん化を目的とした治療管理マニュアルの作成と教育研修法の開発	独立行政法人 国立成育医療研究センター 石黒 精

(4) 独立行政法人 国立循環器病研究センター

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名	主任研究者名等
循環器病研究開発費事業	内科学第一	教授	斎藤 能彦	重症循環器疾患に対する生体活性ペプチドのトランスレーションリサーチ	独立行政法人 国立循環器病研究センター 寒川 賢治
循環器病研究開発費事業	内科学第一	教授	斎藤 能彦	糖尿病患者における心血管疾患予防の最適化に関する研究	独立行政法人 国立循環器病研究センター 小川 久雄
循環器病研究開発費事業	内科学第一	教授	斎藤 能彦	本邦におけるHFpEF(Heart Failure with preserved Ejection Fraction)の実態に関する多施設共同調査研究～JASPER(Japanese heart failure Syndrome with Preserved Ejection Fraction)研究～	独立行政法人 国立循環器病研究センター 安齊 俊久

(5) 独立行政法人 医薬基盤研究所

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名	主任研究者名等
政策創薬マッチング研究事業	皮膚科学	教授	浅田 秀夫	小豆郡における帯状疱疹発症の大規模疫学研究	(独)医薬基盤研究所 理事長 山西 弘一
先駆的医薬品・医療機器研究 発掘支援事業	皮膚科学	教授	浅田 秀夫	経皮免疫製剤の安全性と感染症ワクチン製剤の臨床応用に関する研究	

(6) 社団法人 日本医師会治験促進センター

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名	主任研究者名等
治験推進研究事業	泌尿器科学	教授	藤本 清秀	治験の実施に関する研究[5-アミノレプリン酸]	(社)日本医師会 治験促進センター 中川 俊男
治験推進研究事業	内科学第一	教授	斎藤 能彦	治験の実施に関する研究[エブレノン]	(社)日本医師会 治験促進センター 中川 俊男
治験推進研究事業	眼科学	教授	緒方 奈保子	治験の実施に関する研究[ブリアントブルー-G250]	(社)日本医師会 治験促進センター 中川 俊男

(7) 経済産業省

研究事業名	所属	職名	研究担当者	研究課題名
戦略的基盤技術高度化支援事業	産学官連携推進センター	特任教授	平尾 佳彦	光光学診断とマイクロ流路を用いた小型高速癌細胞診断装置の開発

(8) 文部科学省

研究事業名	所属	職名	研究担当者	研究課題名
科学技術人材育成費補助金 女性研究者研究活動支援事業	女性研究者支援センター	センター長	喜多 英二	女性研究者が研究を継続・発展させ、キャリアアップを図ることができる環境整備を行う
地域産学官連携科学技術振興事業費補助金<イノベーションシステム整備事業>地域イノベーション戦略支援プログラム(国際競争力強化地域)「けいはんな学研都市ヘルスケア開発地域」	産学官連携推進センター	特任教授	平尾 佳彦	MEMSを用いた無拘束生体計測基盤技術(新たな生体測定・診断システム)の開発

(9) 奈良県

研究事業名	所属	職名	研究担当者	研究課題名
奈良県自殺未遂者支援・調査事業	精神医学	教授	岸本 年史	自殺未遂者等に心理教育を実施し、退院後に問題解決を図るために適切な社会資源と連携するケースマネージャーを養成し、再発を防止する

(10) 奈良県 橿原市

研究事業名	所属	職名	研究担当者	研究課題名
藤原京スタディ	地域健康医学	教授	車谷 典男	ゲンキ高齢者(65歳以上)の元気なヒケツをさぐる健康調査

(11) 奈良県 明日香村

研究事業名	所属	職名	研究担当者	研究課題名
地域医療連携事業	地域健康医学	教授	車谷 典男	あすか健康プロジェクト48

(12) 三重県 名張市

研究事業名	所属	職名	研究担当者	研究課題名
伊賀・奥宇陀地域脳神経疾患医療体制整備に関する調査事業	脳神経外科学	教授	中瀬 裕之	伊賀・奥宇陀地域脳神経疾患医療体制整備に関する調査

(13) 独立行政法人 科学技術振興機構

研究事業名	所属	職名	研究担当者	研究課題名
戦略的創造研究推進事業 CREST	物理学	講師	高木 拓明	細胞における確率的分子情報処理の理論研究
研究成果展開事業 産学共創基礎基盤研究プログラム	解剖学 第一	教授	西 真弓	長残光蛍光体ナノ粒子による担癌マウスの無励起光型蛍光イメージングおよび細胞外マトリックスの動的制御
研究成果最適展開支援事業 A-STEP	動物実験施設	准教授	久保 薫	褥瘡の予防・治療のためのシンバイオテイクスの開発
研究成果最適展開支援事業 A-STEP	地域健康医学	特任助教	大林 賢史	視覚レベル照度ロガーの開発とその実用化試験—光曝露量が健康に及ぼす影響に関する大規模疫学調査における実施—
研究成果最適展開支援事業 A-STEP	血圧制御学	講師	染川 智	肺高血圧症における血中マーカーの開発
研究成果最適展開支援事業 A-STEP	耳鼻咽喉・頭頸部外科学	准教授	山中 敏彰	平衡・運動機能に対する平衡代行システムの効果検証と実用化

(14) 独立行政法人 宇宙航空研究開発機構

研究事業名	所属	職名	研究担当者	研究課題名
宇宙環境利用科学委員会 WG/RT	放射線腫瘍医学	特任教授	大西 武雄	きぼうにおける宇宙生命科学的研究計画

(15) その他 財団法人等

団体名等	所属	職名	氏名	研究課題名
(公財) 武田科学振興財団	脳神経システム医学	助教	高橋 弘雄	脳梗塞モデルマウスを用いた神経回路修復機構の解明と治療への応用
(公財) 内視鏡医学研究振興財団	泌尿器科学	教授	藤本 清秀	デジタルカラーイコライザーを用いた蛍光膀胱鏡診断の精度向上に関する研究
(財) 母子健康協会	小児科学	准教授	野上 恵嗣	抗第Ⅷ因子同種/自己抗体(インヒビター)による第Ⅷ因子凝固活性抑制機序の解明およびインヒビター保有先天性/後天性血友病A患者への新たな止血治療戦略
(公財) 笹川記念保健協力財団	整形外科	学内講師	城戸 顕	骨転移を有する進行期癌患者のQOL向上と維持に関する前向き観察研究
社団法人 農協共済総合研究所	整形外科	医員	上羽 智之	高骨形成能型培養人工骨を用いた外傷後骨欠損に対する治療法の開発
日本イーライリザ株式会社(Lilly Grant Office)	精神医学	助教	深見 伸一	ニューロン神経上皮からの移動開始機構に関する研究
(公財) ソルト・サイエンス研究財団	脳神経システム医学	助教	高橋 弘雄	TRPチャンネルを介したマウス嗅覚によるCO ₂ 感知機構の解析
(公財) 日本腎臓財団	病理病態学	学内講師	中谷 公彦	血管石灰化に対する血中soluble α -Klotho・FGF23蛋白質の意義
(公財) 喫煙科学研究財団(1年目)	脳神経システム医学	教授	坪井 昭夫	喫煙時の匂いにより快・不快感を誘起する脳内神経回路の解明
(公財) 喫煙科学研究財団(5年目)	循環器システム医学	教授	中川 修	転写調節因子の機能調節機構と喫煙関連物質の影響
バクスター凝固関連研究基金 第4回BCRF	小児科学	准教授	野上 恵嗣	新たに確立したトロンピン・プラスミン生成測定法による血友病患者における凝固線溶能の評価
公益信託 成茂神経科学研究助成基金	脳神経システム医学	助教	吉原 誠一	成体新生ニューロンにおいてシナプス形成を誘導するNpas4遺伝子の機能解析
(公財) 武田科学振興財団 特定研究助成	輸血部	教授	藤村 吉博	超巨大VWF多重体活性の制御機構を利用した新規動脈血栓症の予防・治療法の開発
(公財) 在宅医療助成 勇美記念財団	小児看護学	助教	山田 晃子	在宅重症心身障害児への訪問看護師の遊びの実践力を高める取り組み
(公財) 武田科学振興財団	循環器システム医学	助教	坂部 正英	BMPシグナルと新規下流機能分子の心臓形態形成における意義
(公財) すかいらーくフードサイエンス研究所	脳神経システム医学	教授	坪井 昭夫	食べ物の匂いにより心地良さが誘起される脳内神経回路の解明
(公財) 8020推進財団	健康政策医学	助教	田村 光平	都道府県における事業及び予算からみた歯科保健推進体制の検討
(公財) 持田記念医学薬学振興財団	血栓制御医学	講師	松井 英人	microRNAレンチウイルスベクターによる次世代血友病A遺伝子治療法の確立
(公財) 内藤記念科学振興財団	内科学 第一	教授	斎藤 能彦	心腎連関分子機序の解明とそれを用いた新しい医療法の開発
(公財) 万有生命科学振興国際交流財団	内科学 第一	助教	竹田 征治	尿毒症物質(インドキシル硫酸)の制御による可溶性Flt-1を介した慢性腎臓病関連動脈硬化症のメカニズム解明とその治療法開発
(公財) 鈴木謙三記念医学応用研究財団	健康政策医学	准教授	赤羽 学	再生医療に有用な培養細胞シートの簡便な輸送方法確立のための研究
(公財) 三井住友海上福祉財団	薬理学	講師	小澤 健太郎	加齢に伴う酸化ストレスによる脂肪酸受容体の翻訳後修飾のプロテオミクス的手法による解明
(財) 日本糖尿病財団 ノバルティスファーマ研究助成	地域健康医学	学内講師	佐伯 圭吾	メラトニン分泌は糖尿病を予防するか?—対象者1000名の大規模疫学研究—
(公財) 先進医薬研究振興財団	血栓制御医学	講師	松井 英人	自己血管内皮前駆細胞移植による新規血友病A細胞治療の構築
(公財) アステラス病態代謝研究会	脳神経システム医学	助教	吉原 誠一	脳梗塞治療を目指した成体脳における神経回路再編機構
(公財) 先進医薬研究振興財団	血圧制御学	講師	染川 智	新規膜蛋白TMEM100の肺高血圧および右心不全における意義の解明

平成24年度後期公開講座『くらしと医学』を下記のとおり開催します。
申込み・受講料共に不要ですので、皆様お誘い合わせの上、ぜひご聴講ください。

日時：平成25年2月16日(土) 13時～15時30分
場所：なら100年会館 大ホール (奈良市三条宮前町7-1)

プログラム：

●公衆衛生看護学 講師 入江 安子

「地域の“ちから”の発見 ～コミュニティレジリエンスとは～」

概要：困難な状況があってもうまく適応できる地域の“ちから”がコミュニティレジリエンスです。講座では、健康問題を視点においた奈良県下のコミュニティレジリエンス育成の取り組みと、その成果について紹介します。また、コミュニティレジリエンスを育成するための市民と専門職の役割についても考えたいと思います。

●分子病理学 教授 國安 弘基

「食事とがん ～大腸がんの話～」

概要：大腸がんは、ここ半世紀増加の一途をたどり、部位別がん死亡率は女性で1位、男性で3位となっています。大腸がんは食事との関係が強いがんと言われ、欧米式の生活スタイルとの関連が指摘されています。どのような食事が大腸がんのリスクになるのか、その予防法は何か、身近な例を挙げわかりやすく説明します。

●精神医学 教授 岸本 年史

「防ぎたいうつ病、認知症」

概要：市民一人ひとりが、心の健康問題の重要性を認識するとともに、自らの心の不調に気づき、適切に対処ができることがこころの健康には必要です。うつ病や認知症の早期発見、早期治療もその一つですが、どのような機関に相談すればよいのか、本講演を通して知って頂き周囲の方々に情報を普及いただける事を願います。

<http://www.naramed-u.ac.jp/info/openlecture.html>

(経営企画課)

電子カルテシステムのハードウェアを更新します

平成18年12月に運用を開始した電子カルテシステムは運用開始から6年を経過しています。一般にOA機器は5年程度の利用が目安であり、病院業務のように24時間業務では通常のOA利用に比べ故障が発生する割合が高くなります。そこで、機器故障による診療等への影響を出来るだけ避け安定したシステム稼働を目指して、今年度に電子カルテシステムのハードウェア更新を行っています。

主な更新内容としては、多くのカスタマイズがされた電子カルテシステムのソフトウェアはそのまま利用し、最新のハードウェアへの更新及び部門システムの一部ソフトウェアの更新を実施します。

更新概要 サーバ(83台)、端末(1,712台)の更新(部門システム及び予備含みます)

端末OSをWindowsXPからWindows7に変更

端末の見直し(液晶一体型パソコン導入、19インチディスプレイ採用)等



新規導入の液晶一体型パソコン

また、現在病棟で利用している無線LANについて、病院内全域にエリアを拡大し、タブレットやスマートフォンなどの新しい機器への対応など幅広い活用を図っていきます。

更新にあたっては、旧サーバから新サーバへのデータ移行やサーバの切替等で発生するシステムの停止を最小限にし、極力診療等業務への影響を避けるように更新計画を策定して作業を行っています。

更新のスケジュールとしては、平成24年5月の栄養管理システムをスタートとし、順次部門システム、ネットワーク機器、端末ディスプレイ等の更新を行い、平成25年2月9日～11日の3連休においては電子カルテシステム、医事システム等院内共通システムのサーバ、端末及び電子カルテシステムと同時に更新しなければならない部門システム等の更新を実施します。

更新のための事前調査、更新作業等で診療現場や各部屋に入らせていただくことがあります。また、2月9日

2月8日(金)	2月9日(土)	2月10日(日)	2月11日(月)	2月12日(火)
外来終了後	端末更新 システム停止(12時間程度)		通常外来	

電子カルテシステム等のサーバ切替スケジュール

(土)の夜には電子カルテシステム等のサーバ切替のため12時間程度の電子カルテシステムの運用停止を予定しています。病院職員の皆様にはご不便をおかけいたしますが、ご理解ご協力いただきますようお願い致します。

奈良県の周産期医療提供体制の整備とその成果

産婦人科学 部長 小林 浩

県外搬送が常態化していた奈良県にとって、2006年8月に発生した「大淀病院事案」、さらに2007年8月に発生した「橿原妊婦産産事案」を契機に行政・医療者を中心に、周産期医療を根本から見直すため、2007年9月に知事を議長とした調査委員会が設置され、頻回の会議を重ねた結果、わずか2か月後の11月に調査報告書が作成され、再発防止に向けて対応策が示されました。

奈良県では周産期医療に関して医療機関の役割分担がなされていませんでした。そこで、2008年より奈良県が主体となって「産婦人科一次救急体制の整備」の取り組みを行い、県の北部（奈良市）と中南部（橿原市）の2か所で平日夜間と土曜祝祭日の一時輪番を開業医が担当するシステムが構築されました。本来、一時輪番は市町村の事業ですが、県が主体の一時輪番は他に類を見ないシステムであると思います。その影響で、大学附属病院や県立病院へ一次の患者が押し寄せることがなくなり、二次、三次医療に専念する環境が整備されつつあります。

さらに、最も重要な「ハイリスク妊婦の受け入れ体制の確立」に関しては、奈良県周産期医療ネットワークを再整備しました。主に奈良県立医科大学附属病院（総合周産期母子医療センター）、県立奈良病院（地域周産期母子医療センター）、天理よろづ相談所病院、近大奈良病院がそれぞれの病院のメリットを生かした連携を行うシステムを構築しました。さらに、市立奈良病院、奈良社会保険病院、大和高田市立病院なども本システムをサポートする体制が整ってきました。

産婦人科医の確保の面でも、医大入学定員増と奨学金制度の充実、学生・研修医に対する奨学金制度の充実、時間外手当の充実、勤務環境改善等はすでに整備されており、概ね他の府県と足並みを合わせていると思います。なお、県が主体となった一時輪番やハイリスク妊婦の受け入れ体制整備の確立およびその運用に関しては、個々の勤務医や開業医の努力のみならず、奈良県産婦人科医会・学会・医師会の大きな推進力のもとに実現されたことであります。

本システムを有機的に運用することにより、母体搬送の県外搬送率は従来の30%前後から、わずか2年度の2010年以降は4～8%にまで低下してきました。しかし、まだ満足の数値ではなく今でも周産期広域救急医療体制を利用し大阪のOGCSには多大なるご迷惑をおかけしています。今後とも更なる改善を図る必要があります。

奈良県では、周産期医療提供体制に関して、ハード面・ソフト面・ヒューマンが少しずつではありますが充実してきておりますので、我々医療者の連携と県をはじめとした行政のバックアップによりさらなる産科救急体制の整備を実行し、奈良県全体として断らない周産期医療を提供したいと考えております。

平成25年度 奈良県立医科大学附属病院 臨床研修マッチング結果

臨床教育部長、附属病院卒後臨床研修センター長 福井 博

来年度の奈良医大附属病院のマッチング結果が発表されました。昨年度より総数は少なかったものの約50人を確保し、当初の予想に反してますますの成績であったかと思えます。ただ、この結果が何もせずには得られた訳ではありません。これに至るまで臨床研修センターとして学内5回、学外3回の説明会を行い、対象となる本学6年生には臨床教育部長として何度も面接を繰り返し、進路指導をするという大変な労力を要した結果がこれであったということです。説明会を重ねることに出席者が減り、昨年の半数程度を低迷しており、危機感を高めておりましたが、落ち着くべきところに落ち着いたという感じです。今回は奈良医大附属病院にも増して、県立奈良病院、三室病院への応募を積極的に勧めました。臨床各科もそれぞれ力を入れて指導をしていただきましたし、PBL発表会についても学会発表の前のように懇切に指導を加えていただきました。学外の研修病院を希望する学生の大多数が異口同音で理由としてあげるの、研修医の数が多過ぎて症例数や実技経験数が十分でないという点です。私たちが最大限の努力を重ねているつもりですが、なお改良すべき点があるのかもしれない。一方で指導医たちの声をもっと聞かねばなりません。奈良県の高度先進医療の中心として、そしてまた研修病院の代表として、指導医たちは日夜奮闘努力しています。とりわけ、将来自分たちの診療科にほとんど来ることのない研修医全員を懇切丁寧に教えなければならないという責務を負った内科指導医たちの声には耳を傾けなければなりません。新制度発足以来、内科入局者数は100人以上は減っており、このままでは内科医不足のために奈良県の大半の病院が早晚立ち行かなくなり、老化した臨床研究棟を一日も早く新しくし、奈良県の医療を真剣に考える学生を1人でも多く入学させることが疲れた指導医たちの気持ちを繋ぎます。一旦、大学を離れた研修医を後期に呼び戻し、全国の奈良県出身者を集めるためには各科が学会活動、社会活動でさらに存在感を高めなければならないことは当然のことですが、病院、大学の施設整備は欠かせません。地域医療崩壊の危険を回避するために、奈良県の医療を守り続けるために、全学で英知を傾け、一致団結せねばなりません。私たちは既に来年度のマッチングに向けて始動しています。皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

プログラムの名称	臨床研修プログラムA	臨床研修プログラムB	臨床研修プログラムC1	臨床研修プログラムC2	計(人)	マッチ率 (マッチ者/定員) 自学占有率 (本学学生/マッチ者)
プログラムの内容	基本的に医大附属院だけでローテートするプログラム	医大附属病院と協力型病院をローテートするプログラム	産婦人科医を目指すための特別プログラム	小児科医を目指すための特別プログラム		
募集定員	39 (40)	14 (14)	2 (2)	2 (2)	57 (58)	
マッチング者数	34 (38)	11 (13)	1 (2)	2 (2)	48 (55)	84.2% 94.8%
うち本学学生	27 (30)	9 (11)	0 (0)	2 (1)	38 (42)	79.2% 76.4%

参考	今回(H24. 10. 25発表結果)				前回(H23. 10. 27発表結果)			
	募集定員	マッチ者数	マッチ率	全国順位	募集定員	マッチ者数	マッチ率	全国順位
都道府県別の結果 奈良県	103	86	83.5	10	101	94	93.1%	2位

脳死臓器移植シミュレーション実施報告

脳死判定委員会委員長 救急医学 奥地 一夫



平成22年7月17日から「改正臓器移植法」が施行され、これまでドナーカードによる本人の意思確認が必須であった脳死下臓器提供に関して、家族が拒まないとき、または家族がいないときに可能となりました。更に、ドナーとなる年齢制限が大きく緩和され、本邦で閉ざされていた小児への臓器提供への道が開かれることとなり、脳死下臓器提供は4から5倍に増加しております。

奈良医大では過去に1例だけ脳死下臓器提供を行っておりますが、近い将来に2例目が発生する可能性があります。くわえて昨年実施された病院機能評価の宿題として、臓器提供の体制に関して早期にシミュレーションを実施すべきことが挙げられておりました。前院長の在任中に実施を予定しておりましたが、日程的に困難であり現古家院長に引き継がれ、ようやく実施することができました。

シミュレーションは古家院長以下、脳死判定委員会委員、脳死判定医、看護師長、コーディネーター等の異なる職種の約50人の参加を得て行われました。脳死判定のビデオ上映、臓器提供のシナリオの読み合わせ、中央臨床検査部技師による脳波測定シミュレーション、摘出チームの臓器搬出のルート確認が主要な内容であります。

シナリオ読み合わせでは55歳の男性がくも膜下出血で脳死に陥ったとの想定のもと、オプション提示から法的脳死判定を経て臓器摘出に到るまで、経時的にそれぞれの登場人物に扮した参加者が台詞を読み、一連の流れを疑似体験しました。その間、日本臓器移植ネットワークのコーディネーターから、家族が提出する「臓器摘出承諾書」や脳死判定委員会が作成する「脳死判定の的確実施証明書」などの重要な書類に関して付帯説明がありました。

今回、大きな不備なく行えたことは半年余りにわたる多数の方々の準備の成果であり、ご尽力いただいた奈良県移植コーディネーター、病院管理課を中心とした関係各位に深甚の感謝を申し上げたいと思っております。



本学軽音楽部による 第1回 院内コンサートを開催しました

高度救命救急センター（軽音楽部OB） 關 匡彦



12月17日（月）に本学軽音楽部主催にて院内コンサートを開催いたしました。この数年、同志社女子大学の方々による院内コンサートは行われておりましたが、本学の軽音楽部による院内コンサートは、私の記憶が正しければ15年ぶりぐらいだと思います。軽音楽部OBとして以前より我々の病院の院内コンサートを学内の軽音楽部で開きたいと思っており、この度病院管理課にお願いし、現役の軽音楽部の学生とともに我々OBも参加し、クリスマスコンサートと銘打ってC棟2階売店前の廊下にて、夕方5すぎより院内コンサートを企画開催させていただきました。

本学軽音楽部は創部50年を経過し、医学科、看護学科の学生約30名からなり、今や院内を歩けば軽音楽部OBに当たるといわれるほどの歴史のあるバンドです。普段はグレン・ミラー楽団やデューク・エリントン楽団に代表されるビッグバンドジャズとよばれるスタイルで演奏しておりますが、今回はやや小さい編成で学生9名、OBの医師2名、ゲストボーカル1名のメンバーで、皆さんがよく知っている『ホワイトクリスマス』や『ジングルベル』といったクリスマスソングをジャズバンド用にアレンジしたものを演奏いたしました。また、観客のみならずと一緒に『きよしこの夜』を歌ったり、クリスマスソングだけでなく『石原裕次郎ヒットメドレー』といった歌謡曲も聴いていただきました。

当初はどれくらいの方が来られるか少々心配でしたが、準備していた椅子の数ををはるかにこえ、立ち見となってしまった方も多く、予想以上のたくさんの患者さん方及び院内のスタッフの方々が聴きにきていただきました。また、演奏中に涙を流されていた患者さんもおられ、音楽のもつ力を改めて感じました。

今後も患者さん方の心の癒しの時間、またスタッフの方々の気分転換の時間として、定期的を開催していく予定をしておりますので、よろしくお願いいたします。

医局等の移転のお知らせ

(仮称)中央手術棟の建設につきまして、現在、躯体の中心となる鉄骨が建ち上がってきております。今年中にはI期部分が竣工し、下記のとおり供用開始を行う予定です。

(平成25年6月)正面玄関から精神医療センターへの1階通路の供用開始

(平成25年11月)地階～2階部分の竣工、放射線治療、腫瘍センター、臨床検査部門の移転

(平成25年12月)中検棟、旧がんセンター棟の解体開始

旧がんセンター、中検棟内の医局等

所属	(室名)	現在	移転後	時期
放射線腫瘍医学	医局、教授室、研究室	旧がんセンター棟(3F)	⇒ A病棟(4F)、臨床医学研究棟(4F)	H25年 秋頃
中央内視鏡・超音波部	医局、教授室、読影室	旧がんセンター棟(3F)	⇒ A病棟(4F)、教育研修棟(1F)	
教育開発センター	教室、教授室	旧がんセンター棟(2F)	⇒ 大学本部棟(1F)	
感染症センター	医局、教授室、研究室	旧がんセンター棟(2F)	⇒ A病棟(4F)、教育研修棟(1F)	
中央放射線部X線TV装置	撮影室、操作室	旧がんセンター棟(1F)	⇒ A病棟(1F)[医療安全トレーニング室]	
奈良県臓器バンク	事務室	旧がんセンター棟(1F)	⇒ 看護師宿舎東棟(3F)	
中央臨床検査部	技局、技師長室、研究室	中検棟(3F)	⇒ 看護師宿舎中棟(4F)	
NICU	研究室	中検棟(1F)	⇒ A病棟(4F)	
リハビリテーション部	技局	中検棟(1F)	⇒ 看護師宿舎東棟(3F)	

その他の部門

所属	(室名)	現在	移転後	時期
医療安全推進室	室長室、事務室	A病棟(1F)	⇒ A病棟(4F)	H25年 春頃
医療安全トレーニング室	トレーニング室	A病棟(1F)	⇒ 教育研修棟(1F)[仮移転]	
健康管理センター	センター長室、事務室	大学本部棟(2F)	⇒ 教育研修棟(1F)	
財産管理課、県庁官補課分室	事務室	大学本部棟(1F)	⇒ 教育研修棟(1F)	

なお、上記中検棟、旧がんセンター棟の解体に伴い、右記のとおり医局等が移転します。

詳細な時期等につきましては、決まり次第お知らせ致します。

ご協力よろしくようお願い申し上げます。

(看護部)

糖尿病チームと糖尿病教室の紹介

糖尿病センター(糖尿病看護認定看護師) 鷗山 美樹



糖尿病センターは2011年5月に開設され、医師をはじめ看護師・薬剤師・管理栄養士・検査技師の医療専門職14名が在籍しており、患者さんと共に糖尿病と戦っています。今回は糖尿病センターで取り組んでいる集団指導の糖尿病教室を紹介したいと思います。

糖尿病教室は糖尿病センタースタッフに、薬剤師、管理栄養士、理学療法士、看護師(B棟7階「消化器・内分泌代謝内科」とC棟7階「循環器・腎臓・代謝内科」)が加わった26名で糖尿病チームを結成し、運営しています。外来および入院患者を対象に月2回木曜日の14:15から1時間臨床大会議室で開催しています。平成24年度の内容は表1の通りです。

糖尿病教室では患者さん同士が交流を図り、お互いの悩みを語りあい、どのように糖尿病と向き合い、生活の中で折り合いをつけながら自己管理しているか体験を語りあいます。私達チームは糖尿病療養において、患者さん自身が考えられるように支援することが必要であると感じています。糖尿病教室で患者さんに一方的に知識を教えるのではなく、患者さんのニーズ・レベル・ペースにあわせて興味をもてる教材を活用し、患者さんとともに創りあげる参加型の糖尿病教室を目指して試行錯誤を繰り返してきました。チームメンバーは自己研鑽のために糖尿病療養指導士(CDE)の資格を積極的に取得し、糖尿病教室がチーム連携の場としてよりよく機能するように心がけてきました。糖尿病教室に参加した患者さんの感想では、「糖尿病合併症の怖さが身に染みただけ、予防に心がけます」などの意見が聞かれ、糖尿病教室が行動変容の動機づけになっています。その結果、糖尿病教室参加のべ人数は年々増加しています(図1)。また参加患者の70%が新規患者で占められ、その3割の患者さんが繰り返し糖尿病教室に参加しています。さらに集団教育後は、糖尿病センターでの個別のフォローアップを行い、評価するようにしています。

糖尿病教室を運営していくにあたり大切にしていることは、チームメンバーがお互いの役割・専門性を理解し認め合うこと、足りない点を補いあい、互いに思いやりを忘れないこと、積極的にコミュニケーションを図ることです。これらが、効率的なチーム医療につながると考えています。これからも多職種との連携を大切に、看護師の役割を存分に発揮できるように、質の高いチームケアを目指した活動を進めていきたいと考えます。



表1 平成24年度糖尿病教室のテーマ一覧

講義内容(テーマ)	講師
5月10日 糖尿病教育入院の寸劇	医師、看護師、薬剤師、管理栄養士、検査技師、理学療法士
5月24日 糖尿病と下肢切断	看護師、理学療法士
6月～8月 脱メタボ 3回シリーズ	管理栄養士、医師、看護師、理学療法士
9月6日 糖尿病の新しい治療薬	薬剤師、医師、看護師
11月1日 血糖測定器の紹介	検査技師
11月15日 フットケア	看護師、医師、薬剤師、理学療法士
12月(2回) 年末年始対策 2回シリーズ	管理栄養士、看護師、理学療法士

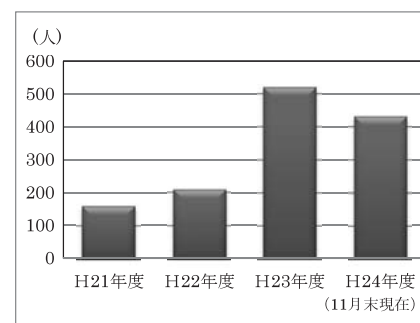


図1 糖尿病教室参加延べ人数

部門紹介

C病棟5階

(神経内科・口腔外科・麻酔科病棟)

C病棟5階病棟は、神経内科・口腔外科・麻酔科の混合病棟です。

神経内科は、脳梗塞、パーキンソン病、ALS（筋委縮性側索硬化症）などの神経難病、また口腔外科では口腔顎顔面領域の良性及び悪性腫瘍、顎関節症、口唇口蓋裂などの患者さんが入院しています。

麻酔科は帯状疱疹や脊椎疾患など疼痛ブロック治療目的に入院される方が多く、乳幼児から高齢者までの幅広い患者層が対象となり、急性期から慢性期、ターミナル期に渡った看護を実践しています。

運動機能障害を持った患者さんが多いため、日常生活援助を中心に緩和・リハビリなどの専門チームと連携を図りながら家族看護も含めた看護を提供しています。多くのケアを通して患者さんから学ぶ機会も多く日々看護師として成長出来る事に喜びを感じています。

また患者さん一人一人の生活背景にまで目を向け、入院時から退院後の生活を見据えた看護に取り組んでいます。

看護師総数33名、スタッフ全員が「心美人一患者さんの身になる看護をしよう」を目標に看護師としての誇りを持ち日々切磋琢磨しながら頑張っています。



C病棟6階

(心臓血管外科・呼吸器外科・放射線科病棟)

私たちの病棟は心臓血管外科・呼吸器外科・放射線科の混合病棟です。ちょっと難しそうなお名前ですが、この病棟の良いところはなんといっても、雰囲気と人間関係の良さです。重症度の高い患者さんが多いですが、在院日数は12日と短く、チーム一丸となって患者さんの回復を支えています。混合病棟のため患者さんいろいろな疾患の方がいるのでとても勉強になります。心臓血管呼吸器外科では、術前・術後の看護やリハビリを必要とする患者さんが多く、それを乗り越え元気に退院されていく患者さんの姿を見ると、「頑張ってたか」と毎回思います。放射線科ではIVR治療をされる患者さんが多くいます。疾患は血管系や消化器系と様々です。

また、仕事ばかりではなく合間の休憩時間では先輩達と看護上の相談50%・楽しいプライベート50%な会話をして息抜きをしながら、皆楽しく働いています。



C病棟7階

(循環器・腎臓・代謝内科病棟)

「VTです！ CPRします！」 「DC持ってきて！ 挿管の準備！」

新人でもこれぐらいのことはやってのけます。だって、ここC病棟7階は、循環器・腎臓・代謝内科病棟ですから。

C病棟7階では、CCUと連携し心疾患患者を受け入れています。心疾患は、今や死因の第2位。不整脈・急変はつきものです。ですが、私たちの病棟はいつだって患者を守る準備ができています。もちろん急変ばかりではありません。入退院を繰り返す心不全患者、CKDやネフローゼ、糖尿病コントロールなどの慢性疾患患者、膠原病などの自己免疫疾患患者、と急性期から慢性期まで、幅広い看護を提供しています。病気と共に生きていく方法、その人にとってよりよい生活が送れる方法、それらを患者さん自身が見つけていけるよう支援しています。

高い技術と溢れるあたたかさ。それが、C病棟7階です。



小児センターに **クリニックラウン** がやってきました!



(財)弘財団はその設置目的「院内生活環境の充実」のもと小児センターと共催し、10月24日クリニックラウンの訪問を受けました。クリニックラウンは、入院生活を送る子どもの病室を定期的に訪問し、遊びや関わり(コミュニケーション)を通して子どもの成長をサポートし、笑顔を育む道化師のことです。クリニックラウンは子どもだけに関わるのではなく、病棟にいるすべての人々に関わります。病棟という空間にいる人同士をつなぐきっかけを造り、療育環境の改善を促してくれます。



訪問中は、子どもたちやご家族、医療スタッフに笑顔がたくさんみられ、とても楽しい時間を過ごすことが出来ました。今後も(財)弘財団のご協力のもと定期的な訪問の機会をつくり、笑顔がたくさんみられる療育環境を提供していきたいと思ひます。



今回ご協力頂きました、日本クリニックラウン協会に感謝申し上げます。

●医療スタッフより一言

子どもたちの笑顔が見られてとても感動しました。ピエロ(道化師)さんが、一人ひとりの子どもと関わり、子どもの発達や病気にあわせていろいろな遊びを提供してくれ、プロは違うなあと思いました。私たちも、入院生活が少しでも楽しい時間になるよう今後も努力していきたいと改めて思ひました。



●ご家族の方々より一言

- ・訪問で親子ともに、元気になり、ころころなごみしました。
- ・闘病の子どもたちにとってひと時の感動を与えていただけて感謝します。
- ・親にとってとてもすごく楽しい企画で気分転換になり、気持ちも明るくなりました。
- ・年齢関係なく楽しい雰囲気というのは、子どもたちにも通じるものなんだと思いました。

小児センターに **サンタクロース!!**



12月20日小児センターで、クリスマス会を開催しました。院内学級のお友だちのハンドベルや院内学級の先生方の演劇など医師や看護師が一緒になってクリスマス会を盛り上げました。今年は、学生ボランティアサークルのみなさんの参加もあり、笑顔がたくさんみられる楽しい時間を過ごしました。小児センター以外の病棟のお友だちのお部屋にも嶋サンタ(小児科 嶋緑倫教授)さんがプレゼントをもって訪問しました。小児センターでは、闘病生活を送る子どもに少しでも楽しい時間を過ごせるよう今後も取り組んでいきたいと思ひます。

なお、この様子はNHKのBS放送でも放映される予定です。

第2回全国医学生クイズ選手権大会で 医学科学生チームが優勝

本学医学科4年生の稲田賢君、川西秀治君、柴田浩気君のチームがCCT(Complex Cardiovascular Therapeutics)2012 -Surgical- (11月3・4日神戸)の第2回全国医学生クイズ選手権大会に出場し、他を寄せ付けない圧倒的な差で優勝しました。

本大会は本学OBの南淵明宏先生(昭和58年卒)を中心に企画され、全国医学部からの応募の中、今回は大阪大学、岐阜大学、京都府立医科大学、島根大学、東京医科歯科大学、奈良県立医科大学の6チームが出場しました。問題形式には3部門(○×、早押し、フリップ)が設けられ、一般教養から臨牀的知識までの幅広い内容が出題されました。また、出場学生は学会セッションや懇親会にも参加し、日本の心臓血管外科を支える多くの外科医や同世代の出場学生との交流を深めました。

次回は2013年10月に開催予定です。皆さんも応募してみてはいかがでしょうか。



(左より、川西君、南淵先生、茨木保先生、稲田君、柴田君、西川君、井上君)

「大和路」を描いた絵画を寄贈いただきました



森下賢治(喜文氏ご長男)氏への感謝状贈呈式

このたび、「大和路」の四季おりおりの姿を主なテーマとして、数々の素晴らしい作品を制作されておられます森下喜文先生から、水彩画43点を本学に寄贈いただきました。

森下先生は、奈良市のお生まれで、奈良師範学校をご卒業後、教員(奈良学芸大学附属中学校 県立奈良高校等)の傍ら多くの展覧会に出展され、日展特選、奈良県文化賞等、数々の賞を受賞されておられます。

また、一水会に所属され全国的にご活躍のほか、県立美術館への作品収蔵、「県政奈良」(1973年)の表紙絵担当等、その作品は県民の皆様にも多く親しまれております。

今回、ご寄贈いただいた絵画も、奈良の寺院の佇まいを厳粛に描いた水彩画等、見応えのある作品ばかりで、今後、附属病院の院内ギャラリーに順次展示させていただきますので、皆様、是非ご鑑賞ください。

～児童虐待防止委員会の捜査協力等に対して感謝状～

昨年7月に起こりました児童虐待事件に関し、先般、本院の「児童虐待防止委員会」の関係機関への迅速な通報や警察と医師等との連携調整を図るなど事件解決に向けた各種捜査協力に対して、田原本警察署長から感謝状が贈呈されました。

残念ながら、児の命を助けることはできませんでしたが、この事件によって、市町村、奈良県の行政機関や私たち医療機関も虐待防止に対する積極的な取組みの必要性を痛感したと思います。

今後は、より一層、地域と行政と医療機関が的確に情報共有し、協力しあって児童虐待を防止していくことが大切です。

このような痛ましい事件が起こらないように願うとともに、お亡くなりになられた児のご冥福をお祈り申し上げます。

児童虐待防止委員会委員長 嶋 緑倫



嶋委員長と田原本警察署 中岡署長

「血液凝固第VIII因子代替抗体による新しい血友病A治療コンセプト」が Nature Medicine誌に掲載

小児科教室嶋 緑倫教授と吉岡 章学長は、中外製薬株式会社と共同で血液凝固第VIII因子の機能を代替する作用を有するバイスペシフィック抗体が血友病Aモデル動物において止血作用を発揮することを、Nature Medicine電子版（10月号）に掲載しました。

血友病Aは、第VIII因子の先天的な欠損または活性低下により血液凝固反応が障害されるために、幼少期より重篤な出血症状を反復する遺伝性疾患です。

血友病Aの止血治療には、出血時に第VIII因子製剤を投与するオンデマンド止血療法と出血を予防する目的で、定期的に投与する定期的補充療法が行われます。しかしながら、第VIII因子製剤の作用時間は短く、一般的な定期補充療法では週3回あるいは隔日に静脈内投与する必要があります。現在の血友病で強く求められているのは長時間作用し、インヒビターの保有例にも有効な治療で、かつ、投与が簡単なものです。

本バイスペシフィック抗体は免疫グロブリンであり、作用時間は1-2週以上と従来の第VIII因子製剤と比較するとはるかに長いという特性を持っています。

また、本抗体は、インヒビターを保有する患者さんにもインヒビターのない患者さんと同様の治療環境を提供することが可能になります。加えて皮下投与が可能で、頻回の静脈注射を強いられている患者さんやご家族に大きな恩恵をもたらします。さらに、本抗体は遺伝子組み換え型製剤でありウイルス感染の危険はありません。したがって、本抗体を用いた治療は、血友病の治療コンセプトを大きく変える革新的な治療法と言えます。

武田科学振興財団の2012年度「特定研究助成」に採択

輸血部 藤村吉博教授を研究代表者として応募した「超巨大VWF多重体活性の制御機構を利用した新規動脈血栓症の予防・治療法の開発」が公益財団法人武田科学振興財団の2012年度「特定研究助成」（贈呈金額：5,000万円）に選考され、11月12日にシエラトン都ホテル東京において贈呈が行われました。

「特定研究助成」は、我が国の医学の発展に向け、研究機関が総力をあげて取り組む共同研究（学内または複数機関の融合研究）に対して助成されるもので、異分野間の研究、申請機関の注力研究・特有の研究、難病疾患研究などを重視した先見性・独創性の高い研究が対象とされます。

同助成の採択は本学にとっては初めてのことであり、助成研究の実施により血栓性微小血管障害症から急性心筋梗塞および脳梗塞に至る広範囲の動脈血栓症に共通する新規予防法・治療法の開発に向けて成果が期待されます。

研究代表者
藤村 吉博 教授 輸血部

共同研究者			
斎藤 能彦	教授	第一内科学教室	
杉本 充彦	教授	血栓制御医学講座	
福井 博	教授	第三内科学教室	
木村 弘	教授	第二内科学教室	
嶋 緑倫	教授	小児科学教室	
中瀬 裕之	教授	脳神経外科学教室	
中島 祥介	教授	消化器・総合外科学教室	
奥地 一夫	教授	救急医学教室	
和中 明生	教授	第二解剖学教室	
西尾 健治	准教授	総合医療学教室	
松本 雅則	准教授	輸血部	



「特定研究助成」の贈呈を受けた藤村教授（前列右端）



平成24年度

文部科学大臣表彰 医学教育等関係業務功労者

大学における医学についての教育、研究、患者診療等に関する業務について、特に顕著な功績があったとして、11月22日に次のお二人が文部科学大臣から表彰されました。



田中 京子さん
(病院病理部)



岸原 三枝子さん
(看護部)

Report

承認された規程、委員会名簿等については、随時、ホームページにて公開しています。

学内ホームページURL（閲覧は学内のみ可能）

<http://top.naramed-u.ac.jp/> → 「規程・名簿タブ」

※は、公開ホームページに掲載

<http://www.naramed-u.ac.jp/aff/johokoukai/>

（総務課）

役員会及び教育研究審議会の報告

第25回 役員会（平成10月3日）

- 1 教育研究審議会予定案件を承認
(1) 任期を定めて任用する教員の再任手続きに関する規程の改正について
(2) 平成24年度 講座・教員研究費の下半期配分について
- 2 平成24年度の会計監査人として有限責任監査法人トーマツが選任されたことを報告

第7回 教育研究審議会（10月4日）

- 1 再任審査手続きの見直し等に伴う任期を定めて任用する教員の再任手続きに関する規程の改正を承認
- 2 総合医療学に配置する客員教授について渡辺賢治氏を選考、医学科教授選考会議に諮ることを決定
- 3 平成24年度講座・教員研究費の下半期配分について承認
- 4 法人が承継した職務発明等の登録による知的財産権取得に伴う当該発明者への補償金を1案件につき5万円の支払いとすることを承認
- 5 平成23年度大学業務の実績に関する評価結果を報告
- 6 インドネシアからの外国人客員研究員を平成24年10月5日から11月30日まで受け入れることを報告

第12回 教育研究審議会（10月9日）

- 1 第二生理学教授候補者として堀江恭二氏を承認し、役員会に答申
- 2 総合医療学に配置する客員教授候補者として渡辺賢治氏を承認し、役員会に答申

第26回 役員会（10月10日）

- 1 第二生理学教授として堀江恭二氏を決定
- 2 総合医療学に配置する客員教授として渡辺賢治氏を決定。委嘱日を11月1日と決定
- 3 財務状況(8月末現在)を報告

第27回 役員会（10月24日）

- 1 臨床検査技師、診療放射線技師、薬剤師、臨床工学技士、歯科衛生士、視能訓練士の採用予定者数を決定
- ※ 2 先進医療等審査委員会を設置しその運営に関する必要事項を定める規程を制定。平成24年11月1日付けで施行
- 3 紙カルテの廃棄要件を承認
- 4 診療放射線技師採用試験において3名の合格者を決定
- 5 教育研究審議会予定案件を承認
(1) 発明届について
- 6 診療報酬の請求時に明細書の発行を開始することを報告

第28回 役員会（10月31日）

- 1 教育研究審議会予定案件を承認
(1) 任期制教員の再任審査について

第29回 役員会（11月7日）

- 1 第1期中期計画及び平成24年度年度計画の取組状況を確認
- 2 職員採用試験において、臨床検査技師4名、薬剤師10名、臨床工学技士3名、視能訓練士2名の合格者を決定
- 3 教育研究審議会予定案件を承認
(1) 教員人事について
(2) 老年看護学領域の今後の推進体制について
(3) 臨床教授等の選考について
(4) 大学院学則の改正について
- 4 平成24年度決算見込みを報告

第13回 教育研究審議会（11月8日）

- 1 小児科学 嶋教授より提出のあった発明届について、特許等を受ける権利の承継を決定
- 2 教員人事について、1月1日付けの昇任、4月1日付けの採用を承認
- 3 超高齢化社会を見据え老年看護学領域を2つの分野に整理し、一つの分野における教授選考の実施を承認

- 4 任期制教員の再任審査において助教1名の再任を承認
- 5 第1期中期計画及び平成24年度年度計画の取組状況を確認
- 6 第2期中期目標・中期計画策定の進捗状況について確認
- 7 健康政策医学教室から推薦のあった臨床准教授の選考を決定
- 8 大学院において秋入学の希望者に対応するため大学院学則を改正。平成25年4月1日付けで施行
- 9 タイから受け入れている外国人客員研究員の受入期間の延長を報告

第14回 教育研究審議会（11月13日）

- 1 麻酔科学教授候補者として川口昌彦氏を承認し、役員会に答申

第30回 役員会（11月14日）

- 1 麻酔科学教授として川口昌彦氏を決定。発令日を平成24年12月1日と決定
- 2 平成25年度予算編成方針を承認
- 3 教育研究審議会予定案件を承認
(1) 寄附講座の設置について

第31回 役員会（11月21日）

- 1 教育研究審議会予定案件を承認
(1) 起動特別資金(スターターズファンド)の運用について
- 2 職員採用試験において、歯科衛生士4名、看護職員3名の合格者を決定

第32回 役員会（12月5日）

- 1 教育研究審議会予定案件を承認
(1) 教員人事について
(2) 特任教員規程第8条に基づく必要事項について
(3) 寄附講座の設置期間の更新について
- 2 中央手術部副部長（解除）、ペインセンターセンター長、糖尿病センター副センター長の12/1付け病院長発令を報告

第15回 教育研究審議会（12月6日）

- 1 教員人事について、平成24年12月31日付け・平成25年3月31日付けの退職、平成25年1月1日付けの昇任、採用、配置換えを承認
- 2 定年退職後の教員を特任教員として雇用する場合の特任教員規程第8条に基づく必要事項について承認
- ※ 3 医学科教授選考に関する規程及び同規程についての申し合わせに基づく起動特別資金(スターターズファンド)の運用について承認
- 4 寄附講座について平成25年4月1日から「スポーツ医学講座」の新設と「血圧制御学講座」の期間延長を承認
- 5 タイからの外国人客員研究員を平成25年1月1日から12月31日まで受け入れることを報告

第33回 役員会（12月12日）

- 1 臨床検査技師、管理栄養士の採用試験の実施について決定
- 2 リスクマネジメントの枠組みを構築し平成25年度から実施することを決定
- 3 財務状況(10月末現在)を報告

第34回 役員会（12月19日）

- 1 教育研究審議会予定案件を承認
(1) 発明届について
- 2 看護職員採用試験において1名の合格者を決定
- 3 平成25年度医学部医学科推薦選抜試験出願状況(12/14現在)を報告
- 4 中央手術部副部長、集中治療部副部長の1/1付け病院長発令を報告

第35回 役員会（12月26日）

- 1 教育研究審議会予定案件を承認
(1) 教員人事について
- 2 附属病個人情報保護規程について個人情報の利用目的の追加等を行う改正を承認

「メディア掲載情報」をお寄せください ～学報紙面で紹介します～

新聞・雑誌・テレビ等マスコミの取材、テレビ出演、記事を掲載された教職員・学生を、この「学報」紙面で紹介します。

掲載者	掲載メディア	掲載概要
朴 永銖 准教授 (脳神経外科)	毎日新聞 朝刊 11月30日(金)	医療現場において児童虐待の最前線を語った。約20年前に起きた児童虐待をきっかけに「治療だけでいいのか」と一医師として考えるようになる。「大切なのは予防」「ほとんどの虐待はきつと防げる」と信じ関係機関が密に連絡を取り合うことが、いかに重要かを提唱した。

学報バックナンバーはWebサイト上でもご覧いただけます
(<http://www.naramed-u.ac.jp/info/introduction/magazine.html>)

下ツ道 (編集後記)

新年おめでとうございます。

この冬もやはり厳しい冷え込みになりましたね。冬のイベントとして街のイルミネーションが定着し、近鉄八木駅前でも約19,000球のLED電球が点灯しているそうです。冬の寒く澄んだ夜空にはイルミネーションが一層きれいに感じられますので、一度ご覧になってください。奈良医大も研究費の獲得が年々増え、輝いています。本年もよろしくお祈りします。

今村知明

掲載希望の記事等については、各編集委員までお知らせください。

- 今村 知明(健康政策医学)
 - 植村 正人(医療安全推進室)
 - 笹平 智則(分子病理学)
 - 藤本 雅文(物理学)
 - 坂東 春美(公衆衛生看護学)
 - 堀口 陽子(看護部)
 - 岡 眞啓(研究推進課)
 - 永井 淳(教育支援課)
 - 吉田 一良(病院管理課)
 - 大野 達也(総務課・広報室)
 - 植松 聡(総務課・広報室)
- (○印は編集委員長)



広告

笑顔の集まる場所に♡



FUJIKAWA

合資会社 フジカワ

〒518-0836 三重県伊賀市緑ヶ丘本町 1674-1
TEL 0595-21-0833(代) FAX 0595-21-6601

このページに広告を掲載しませんか? くわしくはこちら → <http://www.naramed-u.ac.jp/info/introduction/advertisement.html>